

『いいものは、いい』

ウダ・タマキ

4,270 文字

あらすじ

夫を亡くした和美は、一人寂しい生活を送っていた。趣味と言えば読書と新聞を読むことくらいだが、老眼鏡が壊れてしまっただけからは、それさえも億劫になった。そんな姿を見かねた息子が、和美に眼鏡をプレゼントしようと眼鏡屋へ連れ出した。購入したのはピンク色の老眼鏡。そこから和美に転機が訪れる。

特記事項

いくつになっても希望を持って生きる大切さを伝えたいと思い、今回の小説にしました。

「お金は俺が出すからさ。だから使ってみろって。なっ」

「買わなくていいってば。そんな長く生きるわけじゃないんだし」

「また縁起でもないことを。ほんと、頑固だよなあ」

「あなたこそ頑固ね。まったく誰に似たんだか」

正行が「参りました」とばかりに肩を落とし、短く息を吐いた。

「なあ。可愛い一人息子がプレゼントするって言ってんだからさあ」

そして、諭すような口調に変わる。

「気持ちはありがたいよ。だけど、たかが眼鏡にもったいない。百均でも買えるしね」

つられて和美も穏やかに返す。

「そうは言うけどさあ……」

「けど、何よ」

「いいものは、いいんだって」

正行の一言に、和美はハッとした。

「どうかした？」

「いや、何もないよ」

「ほら、これなんかどうだ。シャレてるじゃん」

「よろしければ、かけてみますか？」

しなやかな手つきで眼鏡を差し出す若い女性店員の爽やかな笑顔。彼女がかかる淡いピンク色の眼鏡が、白い肌によく映えた。和美は思わず「ええ」と微笑み返して受け取った。

「いいものは、いい」

懐かしい言葉の響き。

そう平然と言ったのけたのは、亡き夫の行彦だ。行彦は釣りや写真が趣味だった。やたらと道具にこだわる夫に、和美はいつも呆れた口調で言葉を投げた。

「道具なんか、どれでも一緒でしょうに」

「お前にはわからないんだよ」

「ほんと、もったいない」

「そんなことないさ。いいものは、いいんだって」

竿の先を見つめ、或いはカメラのレンズを磨きながら、いつも行彦はそう返した。

物にこだわりがない和美には、行彦の考え方が理解できなかった。

「よくお似合いですよ」

「えっ、そうですかね」

「こちらはチタンのフレームです。デザインはもちろんですが、軽くて丈夫ですよ」

「いいじゃないか。どうだ？」

「ううん」

和美は視線を鏡に向けたまま、首を左右に少しずつ動かした。

「まあ、悪くないわね」

「だろ？ それにするか？」

「いや、ちょっと待って」

「なんだよ。買う気になったんじゃないのか？」

「ちがうわよ。せっかくだから、他のもかけてみたいの。よろしいかしら？」

「もちろんですよ。いろいろなデザインがございますので」

「あのお……」

「はい」

「店員さんの眼鏡、素敵ね」

「ありがとうございます。これと同じフレームもございますよ。試されますか？」

「わたしに似合うかしらね」

ためらいを装ってそう返しながら、内心では勘の鋭い彼女を称賛していた。

「ピンクって、思い切りすぎじゃないか？」

「いいじゃない。あなた言ってたでしょ？ 新しい出会いがあるかもしれないって」

「確かに言ったけどさ」

行彦が亡くなってから三ヶ月が経つ。ある日、突然、前触れもなく逝った。晩年まで医療と向き合わなければならぬ現代で、ピンピンコロリは理想の最期と言われるが、和美に残されたのは大きな悲しみだけだった。

夫に先立たれて落ち込む和美を見兼ね、正行がかけた言葉の一つがそれだった。

和美は元々、活発な女性ではなかった。本や新聞を読むのが唯一の趣味だったが、最近は老眼鏡のフレームが壊れてしまい、活字から遠ざかっている。チラシが挟まれたままの新聞が整然と積まれているのを見た正行が、半ば強引に眼鏡屋に連れ出したというわけだ。

「これにしようかしらね」

さっきまでの表情とは打って変わり、幾分か柔和になった和美の顔に、正行は呆れながらも安堵した。

「よくお似合いですよ。お揃いですね」

「真似しちゃってごめんなさいね」

「そんな。謝ることなんて。実はこの眼鏡にしてから、良いことがあったんです。ピンクは幸せな気持ちにしてくれる色なんです。だから、これはハッピー眼鏡です。お客様にもきっと良いことがありますよ」

「ハッピー眼鏡だなんて素敵ね」

和美はもう一度、鏡を覗きこんだ。

満更でもない顔だ。

東に面した窓から柔らかい風が吹き、太陽の光がリビングを照らす。行彦の仏壇に手を合わせてから、座卓の上に広げた新聞に目を通す日課が復活した。

桜の開花状況を知らせる記事に、春の訪れが近いとを知る。窓外に視線を移すと、庭のユキヤナギが白い翼を広げるように咲いていた。

「春か……」

止まっていた時が、ようやく動き始めた。しかし、心躍る季節にまだ気持ちは追い付かない。

再び新聞に視線を戻すと、ふと、見覚えのある名前に気付いた。読者から寄せられた投稿記事だ。立花克成(七十五)とある。三年前に妻を亡くし、その悲しみを紛らわすため、油絵を習い始めたそうだ。今ではそれが生きがいとなったらしい。文章はこう結ばれていた。

今年は衣笠公園に咲く、満開の桜を描くつもりだ

立花克成。小中学校の同級生だった彼のことを「かっちゃん」と呼んでいたのは、今から六十年以上も前になる。誰にでも優しく、笑うと目じりにしわが浮かぶのが、印象的な男の子だった。

最後に会ったのは高校生の頃だ。自転車ですれ違いざまに「よお」と右手を挙げる克成に、和美は小さく頭を下げて返した。「少し話せないかな？」本当はそう声をかけたかったが、恥ずかしくて声さえ出なかった。克成の背中を見送る和美を彼が振り返ることはなく、朝陽を受けた桜が、ただ悲しいほどに美しくかった。

初恋の人だった。

数ページを残し、新聞を畳んで老眼鏡をはずした。鼓動が高鳴り、記事の内容が頭に入ってこない。が、すぐに再び新聞を開けると、慌てて老眼鏡をかけ直した。確認したのは各地の開花状況を知らせる記事。

「五分咲きか」

衣笠公園は桜の名所だ。池を囲むように咲く桜が水面に映る

爽やかな風に吹かれ、池のほとりの東屋で読書をするのもいいじゃないか。そんな夢想にある景色の先には、イーゼルに向き合う男の姿が浮かぶ。

もしかして、会えるかしら——

和美は図書館へと向かった。一冊のミステリー小説を借りて、次に向かうは衣笠公園だ。家を出たときよりも、西に向いて伸びる影が随分と短くなった。今日は平年よりも気温が高いらしい。久しぶりの長い歩行に、リュックを背負ったシャツがじわりと湿るのを感じた。

東屋のベンチに腰かけ、ふううと吐き出した息を吹き抜けるそよ風に乗せた。

老眼鏡をかけて小説のページをめくる。アメリカ人女性のシャーロットが、旅行先のホテルで怪事件に巻き込まれるというストーリー。犯人は誰か。いや、それ以上に気になるのは「かつちゃんはどこだ」である。

時おり視線を上げ、目の疲れを癒すように遠くを見つめる。周囲二キロほどある衣笠池の周りを桜並木が囲い、平日とはいえ周遊路には多くの人が行き交っている。克成が絵を描いているならば、一カ所にとどまっているはずだ。自ら探しに行けば良いのだが、緊張してできそうにない。多少の厚かましきは身に付いたつもりだったが、やはり気が小さいのは、あの頃と変わらないようだ。

めくったページがどんどん厚みを増す。いよいよシャーロットが、犯人探しに動き出そうとしたところで日が暮れ始めた。

「よいしょ」

腰を上げ、桜を見上げた。今日一日で随分と開花が進んだ。

夕食を終えると、リビングのソファに腰掛けて新聞を開けた。「あら？」いつもの場所に老眼鏡がないことに気付く。「あ、そうだ」と呟き、リュックの中を確認するが見当たらない。

心臓がドキッと強く打つ。胸に手を当てた。東屋に忘れたに違いない。

「どうしよう……」

もし見つからなくても、優しい正行なら「どんくさいなあ」と呆れて笑い、同じものを買ってくれるだろう。しかし、和美にとっては、あの日、あの店で、あの店員から買ったことに意味がある。それなのに、そんな大切なものを忘れた自分が不甲斐ない。

時刻は二十時を過ぎている。明日の開園を待つしかない。眠れそうにないが、何もする気が起きなかった。シャワーでさっと汗を流し、布団に入った。夜は少し冷えるので、布団の温もりが心地良い。焦る気持ち以上に体は疲れを訴え、

いつの間にか眠りに落ちた。

朝七時の公園には体操やウォーキング、ジョギングに励む大勢の人たちがいた。和美の足取りもウォーキングよろしく早いつもり。目指すは東屋だ。何食わぬ顔して置かれたままの眼鏡ケースを無事に見つきたい。

しかし、東屋に入った和美は呆然と立ち尽くした。テーブルには眼鏡ケースの代わりに、ビールや酎ハイの空き缶が散乱しているではないか。

和美は崩れ落ちるように、ベンチに腰を下ろした。

清々しい朝の公園とは対照的に、和美の心はすさんでいた。「ラッキー眼鏡」と言って笑う店員の顔が頭をよぎり、申し訳ない気持ちになる。

ただ、ひたすら泣きたかった。

「ひどいですよね、放ったらかしにして」

背後からの突然の声に、咄嗟に返すことができなかった。

男性は荷物をベンチに置くと、手際よく空き缶を袋に放り込んだ。

「袋がなかったから、そのコンビニでお茶買ってきたんですよ」

そう言って振り返った男性の笑顔は、数十年の時を超えた。

「かっ……」

「朝の散歩ですか？」

「え、ええ、ちょっと」

「僕は絵を描きに来たんです。そしたら、ここで散乱したゴミと忘れ物を見つけてね。これから公園事務所に届けに行くところです」

男性がポケットから取り出したのは、和美の眼鏡ケースだった。

「落とした人、きっと困ってますよ。早く持ち主の手に渡ればいいですが」

瞳を覆っていた悲しみの涙は、嬉し涙となって頬を一筋伝ってこぼれ落ちた。

「それ……わたしのです」

「あら、すごい偶然だね。それは良かった」

和美は眼鏡ケースを受け取ると、涙を隠そうと慌てて老眼鏡をかけた。

「大切な老眼鏡だったんです。本当に助かりました」

「素敵な色ですね。よくお似合いで」

「ありがとうございます。これ、息子からのプレゼントでね」

「ほう、それはよろしいですね。なるほど、いい眼鏡だ。やっぱり、いいものはいいもんです。僕も絵は素人ですが、道具にはこだわってます」

「ええ。いいものは、いいですね」

「さあ、一安心したところで、僕は絵を描きに行ってきます」

克成がひょいと荷物を抱えて背を向けた。

「あ、あ」

声が出ない。一步、また一步と克成が歩みを進める。

あの日、遠ざかる彼の背中を思い出した。

「あのお、すみません」

克成がゆっくりと振り返った。

届いた――

「もし、よろしければ……少し、お話、できませんか？」

「え？ 僕とですか？」

「はい」

和美を見つめる克成の瞳が、大きく開いた気がした。

「もしかして……」

「たくさん、お話がしたいんです。おじゃまですかね？」

「いいえ、そんなことはないです。もちろん構いませんよ」

克成が目じりに深いしわを浮かべて笑った。

春が来た。

水面に映る満開の桜が、なんと美しいのだろう。和美は心からそう思った。